



## 「新収貴重書展」の開催にあたり

明治大学図書館では、独自の収書基本方針に基づいて、教育・研究に有意義な資料を永年にわたり収集してまいりました。それらの中には、学術上貴重な図書や大型コレクションなど特別な資料もみられます。

たとえば、古地図の一大コレクションである「<sup>あしだ</sup>蘆田文庫」、近世文学の洒落本・読本・草双紙類から成る「江戸文藝文庫」、近代日本文学の初版本などから成る「日本近代文学文庫」やその他の稀覯書をあげることができます。

すでに特色あるコレクションを形成した分野は、更なる充実・発展が期待されています。

こうした新収資料は、ギャラリーで展示して一般に公開してまいりました。

今回は、2013年度に収蔵された資料から、下記のとおり紹介します。

江戸の庶民に親しまれた山東京伝『先開梅赤本』や諸本、近代文学史で重要な『泉鏡花集』などの諸作品、地図成立史研究上に有用な「蘆田文庫」新収蔵本をはじめ、珠玉の資料の数々を初公開いたします。

しばし、紙の本が醸し出す世界にふれ、質の高い文化の薫りの一端をお楽しみくだされば幸いに存じます。

明治大学図書館

# 江戸文藝文庫

1999年、本学文学部教授、故水野稔氏旧蔵書の一括購入を契機に創設された。

江戸時代後期の読本・合巻・人情本・洒落本・黄表紙・滑稽本などからなり、山東京伝『うとうんげ優曇華物語』初版本（文化元年）などがよく知られている。以後、これらの旧蔵書を核として、江戸後期の小説類やその関連資料を収集範囲に定め、図書館で毎年予算を計上してコレクションの拡充を図っている。

拡充の柱の一つが、元埼玉大学教授、故大久保忠国氏旧蔵「ほうこく抱谷文庫」で、江戸時代の文芸および演劇関係の原本を多数収集していることで著名である。

図書館では、役者評判記・番付・せりふ本などの演劇関係資料、式亭三馬・山東京伝・山東京山・曲亭馬琴などの作品その他をまとめた草双紙類、狂言絵本類などジャンルごとに収集を継続している。



## No.1 まつひらくむめのあかぼん 先開梅赤本 / 山東京伝著述；上・中・下 3冊

◆寛政5(1796)年に京伝きやうでんが書き、鳶谷重三郎つたやじゅうざぶろうが出版した黄表紙まびょうし。黄表紙は、挿絵入りさしえの通俗的な読み物をいう。黄表紙は、お正月の縁起物のひとつとされ、江戸っ子の正月は新作の黄表紙で始まった。京伝の作品は世にもてはやされたが、風俗をみだした罪てじょうに問われ手鎖50日の刑をうけたこともあった。



## No.2 うしやぞうだんあくらなべ 牛店雑談安愚楽鍋：一名奴論建 / 仮名垣魯文著 五冊

◆仮名垣魯文かながきろぶん (1829～1894) は戯作者げさくしゃ、新聞記者。江戸京橋に生まれる。安政大地震のルポルターージュ『安政見聞誌』(1855)、『滑稽富士詣』(1860)などの作品で戯作者として認められた。『安愚楽鍋』(1871～1872) は牛鍋ぎゅうなべを楽しむ庶民の生態をスケッチして、文明開化の風俗を生き生きと描写した作品。『西洋道中膝栗毛』(1870～1876) は、十返舎一丸じっぺんしゃいっくの『東海道中膝栗毛』とうかいどうちゅうひざくりげをまねた作品で、弥次さん喜多さんの孫が世界の田舎者いなかものとして港で失敗する滑稽話が評判をよんだ。二つの作品は、ともに魯文の代表作である。



## No.3 とじあわせおでんのかなふみ 綴合於伝仮名書 / 篠田仙果綴；楊洲周延画

◆高橋お伝しゅうぼん (1851—1879) は、郷里で結婚後、病気の夫とともに出奔。夫の死後、東京で暮らす。明治9(1876)年8月借金苦から逃れようと、金目当てで古着商を殺害した。希代の毒婦ようぶとか妖婦とかいわれ、2年余にわたる裁判の後、市谷の監獄で斬首刑に処された。本書は、その評判をあてに出版されたもの。仮名垣魯文かながきろぶんも評判をねらって、処刑の翌月に『高橋阿伝夜刃譚』たかはしおでんやしやものがたりを書いた。



#### No.4 <sup>ぐらんとしでんやまとぶんしょう</sup> 格蘭氏伝 倭文賞3編 / 仮名垣魯文和解 ; 鮮齋永濯画 九冊

◆グラント将軍は米国大統領を退任後、明治 10 (1877) 年から 2 年間、世界旅行に出た。その途中、明治 12 (1879) 年に日本を旅した。初めて訪日したアメリカ大統領経験者で知日派でもあったため、各地で熱烈な歓迎を受けた。明治天皇はじめ要人とも会見し、3 か月余り国内を視察した。本書は、<sup>かながきろぶん</sup> 仮名垣魯文が書いた伝記まがいの作品である。芝の増上寺境内には、グラント将軍が記念植樹した「グラント松」が今も生い茂る。



増上寺境内の「グラント松」

## 日本近代文学文庫

元予科長、小林秀穂教授の寄贈書（文学、哲学書 100 冊）をもとに、1947 年「小林文庫」として設置。日本文学の授業で、薫り高い文学書初版本に触れさせたいという考えに基づいたと伝えられる。1991 年、元図書館長、故佐藤正彰文学部教授の旧蔵書を受け入れるにあたり、今の文庫名に改称した。コレクションは、明治から昭和戦前期までの文学書初版本を中心としている。近年では、文学史上重要な作家については、戦後の作品であってもコレクションに加えている。また、本学関係者の作品やその人となり伝える自筆もの（署名本、草稿、書幅等）も収集している。



#### No.5 泉鏡花集 / 泉鏡花著

◆泉鏡花は、明治 6 (1873) 年石川県金沢生まれ。17 歳で上京、尾崎紅葉<sup>ごうよう</sup>に入門。『湯島詣』<sup>ゆしまちうで</sup> (1899 年)、『高野聖』<sup>こうやひじり</sup> (1900 年) 等を発表し、師の紅葉をしのぐ人気作家となった。大正期になると『夜叉ヶ池』<sup>やしや</sup> (1913 年)、『天守物語』 (1917 年) などの戯曲で、世間の迫害に耐える女の哀れさを幻想的に描いた。今日では、演劇公演が行われ、再評価の声が高くなっている。



## No.6 第二軍従征日記 / 田山花袋著



◆花袋は、明治4（1871）年、今の群馬県館林市に生れる。明治29（1896）年頃より尾崎紅葉に師事し、後に国木田独歩<sup>くにきだどつぽ</sup>、柳田國男、島崎藤村らと交流した。明治37（1904）年に日露戦争が勃発すると、第二軍の写真班として従軍記者をつとめ、戦況をリアルに描き、本書は記録文学の傑作といわれた。明治40（1907）年、代表作『蒲団<sup>ふとん</sup>』を発表。さらに1909年の『田舎教師』などにより自然主義派の代表的作家となった。



## No.7 青い夜道：詩集 / 田中冬二著



◆田中冬二は、明治27（1894）年生まれ、本名は吉之助。銀行勤務のかたわら、郷愁や旅を題材に詩作した。「青い夜道」（1929年）は、山国や北国の自然、日常生活を初々しい感覚で表現した叙情詩集。冬二は、多作ではないが、日本の自然や生活に根ざした詩を作り続けた。吉行淳之介は、彼を「青い夜道の詩人」と評したという。



## No.8 思弁の苑：詩集 / 山之口猷著



◆山之口は、明治36（1903）年生、沖縄県出身、昭和時代の詩人。各種の職業を転々としながら詩作に励んで、佐藤春夫、金子光晴らの詩人と交流して、風刺とユーモアを感じさせる詩を発表した。

「家はもたぬが正直で愛するに足る青年だ。金にはならぬらしいが詩もつくってゐる。（中略）その男の詩は枝に鳴る風見みたいに自然だ、しみじみと生活の季節を示し単純で深味のあるものと思ふ。誰か女房になってやる奴はみないか。誰か詩集を出してやる人はみないか」（『思弁の苑』（1938年）巻頭 佐藤春夫の序詩より）

『思弁の苑』というのが ぼくのはじめての詩集なのだ  
その『思弁の苑』を出したとき 女房の前もかまわずに  
こえをはりあげて ぼくは泣いたのだ（『鮪に鰯<sup>まぐろ いわし</sup>』（1964年）より）



## No.9 孤寒 / 種田山頭火著



◆『孤寒』は、昭和7（1932）年から昭和15（1940）年までに経本仕立てで刊行された小句集七冊のうち、六番目の句集。昭和12年春から翌年夏までの句が収められ、昭和14年1月山頭火57歳の出版。「銃後」25句、「草庵消息」56句、「旅心」36句の三部構成。昭和12年7月に蘆溝橋事件があり、当時は、日中戦争へ至る暗い時代だった。

「銃後」の冒頭に、「天われを殺さずして／詩を作らしむ／われ生きて／詩を作らむ／われみづからの／まことなる詩を」が置かれ、「まことなる詩」を作ることに、山頭火は自分が生きる意味を見出している。行乞<sup>ぎょうこつあんぎゃ</sup>行脚の人生でつねに死を意識し、死期を悟ったのはこの時期とされる。翌昭和15年10月11日晩に死す。





## No.10 老妓抄・川 / 岡本かの子著



◆かの子は、明治 22（1889）年東京生まれ。次兄と友人谷崎潤一郎から文学的影響を受け、与謝野鉄幹と晶子の新詩社に加わり浪漫派歌人として出発。東京美術学校の画学生岡本一平と結婚。芥川龍之介をモデルにした小説『鶴は病みき』（1936 年）を、川端康成の推薦で『文学界』に発表、文壇デビューした。多摩川の岸辺で育ったかの子は、ある日、何かに憑かれたような情熱で『川』の冒頭を一気に書上げたあと、起承転結を構成した。本書は、かの子の文学的原点といわれる『川』と、園子という芸妓を描いた代表作『老妓抄』を和本に仕立て一つの帙に収め、帙の裏面に、かの子筆「観音経」を表装。長男の太郎は、「芸術は爆発だ」の名言を遺した世界的芸術家。



## No.11 詩集富士山 / 草野心平詩 ; 土門拳写真 ; 高村光太郎題字



◆福島県いわき市出身で、蛙をテーマとした詩を生涯書きつづけ、「蛙の詩人」といわれた。昭和 15（1940）年から富士についての詩を発表し始め、以後、富士山は心平の詩句に頻出する。同年、南京にわたり、数年間、その地を中心に創作活動に励んだので、じっさいに富士山を見て詩作したわけではない。昭和 18（1943）年に 17 篇をまとめて『富士山』として刊行した。昭和 62（1987）年、文化勲章受章。



## No.12 十三妹 / 武田泰淳著



◆何玉鳳は幸せな家庭に育ったが、両親を殺され運命が一変する。玉鳳は復讐を誓い、武術の達人のもとでクンフーの修行を積み、師匠から十三妹と名づけられた。十三妹は日本刀を武器に悪人どもを斬りまくり、親の仇を追い詰めてゆく。泰淳は、明治 45（1912）年、東京本郷に生まれ、東京帝国大学中退。学生時代、左翼運動に加わり、三度逮捕後に転向。敗戦体験から得た滅亡の観念を軸に、人間の存在を告発する力作や優れた評論を書いた。1955 年以降、長編小説を中心に執筆し、代表作の『富士』（1969～71 年）は、戦後文学史の記念碑的作品といわれる。



## No.13 流離譚 / 安岡章太郎著 ; 上・下 2冊



◆安岡は、大正 9（1920）年高知市に生まれた。土佐の安岡一族のルーツを求め、幕末の土佐藩士にたどり着く。その一人安岡嘉助は、文久 2（1862）年、藩の参政吉田東洋を刺殺し、脱藩。天誅組に入り京に上るが、志半ばで刑死した。本書は日記や書簡を手掛かりに、実感を大切にしながら臨場感あふれる語り口で、歴史の曲折に光を当てた長篇歴史小説で、日本文学大賞受賞。平成 13（2001）年文化功労者となった。



#### No.14 幽霊 / 北杜夫著



◆著者は、歌人斎藤茂吉の次男で精神科医。昆虫採集に熱中する少年の心に、幼い日に去った母親のイメージがふとよぎる。美少女に寄せる思慕、過去の希望と不安が、<sup>さき</sup>前の戦争敗戦前後の高校生の胸によみがえる。本書は、幼少年期の追憶を綴った「心の神話」といわれる。このほか、船医の体験をユーモラスに描いた『どくどくマンボウ航海記』がベストセラーとなった。



#### No.15 夏の闇 / 開高健著 ; 特装版



◆主人公は、ベトナム戦争で自分を見失い、ひたすら眠り、食欲に喰らい、セックスに溺れる嫌悪の日々を送るが、ある朝、女性と別れ戦場に回帰する。徒労と倦怠、焦躁と殺戮という暗い世界の中で精神的混迷に光を求め、絶望の淵にあえぐ現代人の魂の救済を描く。本書は、人間性の本質をえぐり、開高文学の最高傑作といわれる。或る読者が<sup>かいこうたけし</sup>開高健の名前を「書いた、書けん」と変読みしたのを気に入って、「かいこうけん」と本人が名乗ったこともあった。



#### No.16 <sup>レイン・ツリー</sup>「雨の木」を聴く女たち / 大江健三郎著



◆荒涼たる世界と人間の魂に水滴を注ぐ「雨の木」のイメージに重ねて、危機にある男女の生死を描いた小説。著者は、雨の木（インドボダイジュ）について「夜なかに<sup>しゅうらう</sup>驟雨があると、翌日は昼すぎまでその茂りの全体から滴をしたたらせて、雨を降らせるようだから。他の木はすぐ乾いてしまうのに、指の腹くらいの小さな葉をびっしりとつけているので、その葉に水滴をためこんでいられるのよ。頭がいい木でしょう」(P.15)と登場人物に語らせている。見返しに、著者の友人<sup>たけみつとおる</sup>武満徹が作曲した「雨の樹」の楽譜原稿がプリントされている。1994年、ノーベル文学賞受賞。

## 蘆田文庫

1957年、歴史地理学者として著名な<sup>あしだこれと</sup>蘆田伊人が生涯かけて収集した古地図コレクション約2000点を購入。内容は、世界図、北方図、日本図、地方図、町図、街道図、水路図、俯瞰図など幅広い分野にわたる。日本図では、江戸時代初期の<sup>ぎょうきす</sup>行基図や<sup>くにえす</sup>国絵図、元禄期の石川流宣『<sup>ともぶ</sup>本朝図鑑綱目』、江戸中期に民間図の主流をなした安永8年(1779)版の長久保赤水『<sup>にほんよちろていぜんず</sup>日本輿地路程全図』、伊能図、明治期の地形図などが系統的に収集されており、日本地図成立史を知る上で有意義なコレクションとされている。

地方図には、当該地域ですでに失われてしまった貴重なものが含まれ、また世界図では、大黒屋光太夫が将来した両半球写図や、リッチ系の楕円形図などが所蔵されている。



## No.17 番町絵図 / 狐阡瀬貞雄



◆いわゆる吉文字屋版は最初期の刊行江戸切絵図で、宝暦5年（1755）から安永4年（1775）までの間に8図のみが刊行され、その後中断した。本図はそのうちの最初、つまり江戸切絵図の最初の刊行図である。序には、「審らかに姓氏を録し...尋ねる者の便ならしむ」と記され、武家屋敷を探すために切絵図が製作されたことが示されている。編者は狐阡瀬貞雄。瀬名貞雄（<sup>せなきたあ</sup>1716～1796）は江戸幕府の旗本で、故実、歴史、地理の著作を残す。もう一人の編者<sup>ごうほういしつ</sup>鵜峰依為質については、不明。



## No.18 <sup>あんなんこく</sup>安南国漂流物語 [書写者不明]



◆明和2（1765）年11月、水戸藩領の姫宮丸は銚子浦から帰りの航海中、<sup>ひたちくのくに</sup>常陸国（今の茨城県）の沖合で難破した。南シナ海を漂流して安南（ベトナム）に漂着し、明和4（1767）年7月南京船で長崎に帰着、12月ようやく帰郷した。本書は、漂流民が見聞したことを、長崎まで引き取りに行った<sup>ながくほせきすい</sup>長久保赤水がまとめたもの。長久保赤水（1717～1801）は江戸時代の代表的な地理学者、『改正日本輿地路程全図』等多くの地図を製作した。

# 和貴重書

## No.19 満文原檔 / 馮明珠主編；陳龍貴



◆清朝（愛新覺羅氏）の創始者ヌルハチ（太祖）から次の皇帝ホンタイジ（太宗）に至る清王朝初期の編年体歴史資料。1607年から約30年間の歴史を記述し、清代の政治史、軍事史を研究する上で重要な文献。

書かれた文字は満文を主とするが、満文と漢文が対訳されたページもみられる。2005年に台北の国立故宮博物院から出版されたが、すでに品切れ状態になっているという。

## No.20 二〇〇〇年紀和紙総鑑：日本の心；手漉き編 資料編



◆1500年の時空を超えて伝承され、いま世界的に注目される手漉き和紙に関する大百科事典。日本全国の和紙1000点余を収録し、限定800部で出版。10年の制作期間をかけ、全国の和紙職人の協力で完成した。2014年11月、<sup>せきしゅうばんし</sup>石州半紙（島根県浜田市）、<sup>ほんみのし</sup>本美濃紙（岐阜県美濃市）、<sup>ほそかわし</sup>細川紙（埼玉県小川町、東秩父村）が、ユネスコ無形文化遺産に登録されたことは、日本の誇りでもある。

（表紙図柄 「綴合於伝仮名書」より）